

おじさんの青春日記

ス
ー
パ
ー
ス
タ
ー

あれはもう十年も前のことです。

友達のごんちゃんから電話がありました。ごんちゃんというのは在日朝鮮人で、金融会社を経営しています。金融といってもデーンとした銀行なんかではなく、世間一般では「高利貸し」と呼ばれている人です。動かすお金は十億とも二十億とも。名前を出せばみんなが知っている企業のエライ人が、こっそり裏口からお金を借りにくるのだそうです。

「ねえ、矢沢永吉いうて知つとる？」

「知らん。何や、それ？」

「テレビなんかじゃ出んらしいけど、なんでも若いモンにはえらい人気があつて、スーパースター言われとるらしい。あいつ、ワシの同級生なんよ」

「へエー。それで？」

「あした体育館であいつのコンサートがあるらしいんよ。ワシ、音楽さっぱり苦手じゃけど、何十年ぶりにあいつに会うてみたい。一人で行くのテレくさいし、あんた、あしたヒマ？」

翌日、二人は夕暮れの体育館の前で、会場を取り巻く長蛇の列をしばらく茫然と眺めていました。

ごんちゃんは広島生まれの広島育ち。中学校で矢沢永吉さんと大の仲良しで、毎日のように暗くなるまで二人で野山を駆けまわった仲だそうです。

「えらいもんじゃ。この人たち、みんな金払つてあいつの歌聴きにきとるんじやろうか？ワシが訪ねていったら、あいつびつくりするじやるのお。あつ、ワシ、うっかりして花束なんか持つてくるの忘れとつた。まんじゅうでも買つてこうか？」

「ええよ、ええよ。ごんちゃんが訪ねてきてくれただけで、永ちゃん喜ぶよ」

「何しろ、コンサートとかいうもん、いっぺんも行ったことないけ。マナーいうもんがわからん。まつ、あんたにあとから永ちゃん紹介するけつ」

ごんちゃんは少しく興奮の面持ちで、新調のスーツの背をなびかせて、颯爽と楽屋口に向かいました。

思いがけず早く楽屋口から出てきたごんちゃんは、いつになく思いつめたような顔をして私に言いました。

「飲みにいこ。飲みにいこ」

「どうしたんや。どうじゃつた？」

「」

「あいつ、ワシにや会いとつない言つとるらしい。昔の友達にや会いとつないんじやと」

「ごんちゃんのこと、忘れとるんか」

「いいや、しっかり覚えとるけど今日は会いとつない、言つとるいうて、取り巻きが申し訳なさそうにワシにそう言つた」

ステージから響いてくるバンドの音を背に、二人は言葉少なに夜の街へ歩きました。

酒場のカウンターで、ごんちゃんはテレ笑いを浮かべて水割りの氷と遊びました。

「ワシは別にあいつにせ二たかろうとか、メシ食わせ、言つつもりで行つたんじやない。わかるじやろ？」

「わかつとるよ、そんなこと。誰もそんなこと思わんよ」

「ただ、あいつと遊んどつた昔のことが懐かしゅうて。ワシの友達があんなに有名になつたことが、ワシはほんまに自分のことのように嬉しかつただけなんじや」

すっかりしおれてしまったごんちゃんを慰める言葉が、私には容易にみつきりませんでした。

「ワシは朝鮮人じゃけ、小さい頃からずいぶんくやしい目にも合うてきた。親は原爆におうて体は弱いし、家もほんまに貧乏じゃった。まあ、あの頃は終戦のすぐ後で、日本全体が貧しかったんじゃけどね」

ふだん全くお酒を飲まないごんちゃんは、水割りを何杯もおかわりをしながら視線を宙に浮かせて話し続けました。

「じゃけど、あいつの家はワシなんかより、もっとひどい貧乏しとったんじゃ。犬小屋みたいな家におばあさんと二人で住んどった。そりゃあ、貧乏なワシでも同情するほどじゃった。でもあいつとは何でか知らんけどウマが合うて、いつも二人一緒じゃった。あいつが喧嘩でやられたらワシが助けに行く。ワシがいじめられたらあいつがワシの盾になってくれる。まあ、二人は連合軍じゃったわけよ」

ごんちゃんがその夜初めて、楽しそうに笑いました。

「ワシにとつては懐かしい思い出も、あいつにとつては触れられとうない、つらい思い出じゃったんかも知れんのお。もうあいつに会うことは二度とないじゃろう。あいつはあいつの世界でビッグになりやあええし、ワシはワシで精一杯やるしかないよね」

その夜ごんちゃんは、永ちゃんを夜の街に招待しようとする用意していた、びっくりするほどの大金を、私と二人で一夜で使いきってしまいました。

ごんちゃんと永ちゃんが青春を過ごした町は、原爆の爆心地からわずか二キロのところ。その町のすぐそばに、今も、時のうつりがなかったようにゆったりと川が流れ、モダンに整備された河畔の夾竹桃が秋の風に揺れています。

了